

《 研究ノート 》

## 『源氏物語』 第四帖「夕顔」の中国語訳について（2）

大野 公賀

### 1. はじめに

小論は『東洋法学』第64巻第3号（2021年3月）に投稿した《研究ノート》「『源氏物語』 第四帖「夕顔」の中国語訳について」（以下、前編と表記）の続編である。前編でも述べたように、『源氏物語』の中国語訳本には十数種類が存在するが、その中でも代表的なのは中国本土で最初の完訳である豊子愷（1898-1975）の訳本（人民文学出版社1980-83初刊）と、台湾の林文月（1933-）による訳本（中外文学月刊社1974-78初刊）である。この二つの翻訳の背景等については前編で論じた。

### 2. 豊子愷訳と林文月訳の相違例

小論では前編に続き『源氏物語』 第四帖「夕顔」について、豊子愷と林文月の中国語翻訳を原文および彼らがともに参照した与謝野晶子、谷崎潤一郎の翻訳と比較検討する<sup>(1)</sup>。記載方法は、前編と同じく【翻訳者名 頁数-行数】とする。与謝野訳の「上・下」はそれぞれ上段・下段を指す。また訳者注については、それぞれ元の表記にしたがって数字あるいは片仮名で表記する。ただし、豊子愷と林文月については、前編同様に中国語原文は省略し、日本語訳のみを記載する。現代語訳ならびに豊訳と林訳の日本語訳は大野による。光源氏については、以下源氏と略記する。また、ルビは紛らわしい場合を除いて、基本的に省略する。

(1)

【原文129-7】<sup>しも</sup>かの、<sup>しも</sup>下が下と、人の思ひ捨てし住まひなれど、そのなかにも、<sup>しも</sup>思ひのほかにくちをしからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり。

原注八：あの、最下級だといって、<sup>とう</sup>頭の中将が問題にしなかった身分の者が住んでいそうな家だが。雨夜の品定めに、頭の中将が「<sup>しも</sup>下のきざみという際になれば、ことに耳たたずかし」【原文49-13】と言ったことをさす。

原注九：予想に反して美しい人を発見したならば（どんなにすばらしいか）と。雨夜の品定めに、馬の頭が「<sup>かみ</sup>さびしくあばれたらむ<sup>むぐら かど</sup>葎の門に、思ひのほかにも、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおほえめ」【原文52-1】と言ったことが念頭にある。

【現代語訳】あの、下層のなかでも最下層だと言って、人が問題にもしなかった（階級の）住まいであるが、その中にも、予想に反して素晴らしい女性を見つけたならば（どれほど嬉しいだろう）と、お心が惹かれるのであった。

大野注：原注八に示されているように、冒頭の「かの、下が下と、人の思ひ捨てし住まひ」は、『源氏物語』第二帖「帚木」の「雨夜の品定め」で、頭の中将が「下のきざみといふ際になれば、ことに耳たたずかし（訳：中流階級よりも更に下層の女性になると、格別注意もひかれませんか）」と述べたことを受けている。「雨夜の品定め」は、光源氏が十七歳の夏の雨の夜、物忌みのため宿直をしていたところへ、頭の中将、左馬の頭（原注八の「馬の頭」は左馬寮の長官である左馬の頭を指す）、藤式部の丞が来て女性の品評をし、理想像や体験談を語り合う場面である。したがって「人の思ひ捨てし住まひ…」の「人」は頭の中将と考えられる。

それに続く「そのなかにも、思ひのほかにくちをしからぬを見つけたらば」の個所は、原注九にあるように、同じく第二帖「帚木」での左馬の頭の発言「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかにも、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおほえめ（訳：人の出入りもないので荒れ果て、葎がはいまつわって門も開かなくなったような家に、思いがけないこ

とに愛らしげな女性がひっそりと閉じ籠められたように住んでいるのは、この上なく心惹かれるものなのですよ)」を受けている。

【豊沢66-5】他心中想：“这夕顔花之家，大约就是那天雨夜品评中所谓下等的下等，是左马头所认为不足道的吧。然而其中也许可以意外地看到优越的女子。”他觉得这倒是稀世珍闻呢。

訳：光源氏は心中で「この夕顔の花の咲く家はおそらく、あの雨夜の品定め  
の折に話に出た下級中の下級で、左馬の頭が語るに足らぬとした家であろう。だが、その中に予想に反して優れた女性を見出すやもしれぬ」と考えた。しかし源氏はまた、そのようなことは珍しかろうとも思うのであった。

【林沢66-7】這該是屬於那晚談論到的「等而下之」品級吧，本來源氏對此並無甚興趣的，如今却覺得：萬一能在這中間發現意外的佳人，倒也挺有意思。

訳：ここはおそらくあの夜、話にでた「更に下」の階級なのであろう。源氏はもともと、そのような階級には少しも興味がなかったのであるが、今ではむしろ、もしここで思いも寄らぬ美人を見つけたならば、なんと心惹かれることよと思うのであった。

【与謝野沢55-上9】家は下の下に属するものと品定めの人たちに言われるはずのところでも、そんなところから意外な趣きのある女をみつけ出すことがあればうれしに違いないと源氏は思うのである。

【谷崎沢104-4】これこそいつぞや<sup>け</sup>下の下の品に数え入れて問題にしなかった住居であるが、そういう中から思いのほかに取柄のある人を見つけたならばと、珍しくお思いになるのです。

【相違点】ここで豊沢と林沢の相違点としては、冒頭の「人」と後半の「めづらしく思ほすなりけり」の二点が挙げられる。まず「人」であるが、【現代語訳】大野注で述べたように頭の中將を指す可能性が高いが、豊子愷は左馬の頭と訳している。林文月は、ここが「雨夜の品定め」を受けた個所としながらも、「人」について特定していない。これは、与謝野晶子が「品定めの人たち」とし、谷崎潤一郎が特に訳出しなかったのと同じである。同じく【現代語訳】注に記載した言葉「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに、らう

たげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおほえめ」から明らかかなように、左馬の頭は中流のみならず最下層の女性に対しても好意的であるため、ここでの「人」を左馬の頭とするのは誤訳で、頭の中将あるいは与謝野訳のように「品定め」の同席者とするか、林訳・谷崎訳のように訳出しない方が望ましいのではないかと思う。

次に形容詞「めづらし」には①賞美すべきだ、心が惹かれる、素晴らしい、②珍しい、今までに例がない、③新鮮だ、目新しいなどの意味がある。ここを豊子愷は「稀世珍聞（珍しい）」、林文月は「挺有意思（面白い、趣がある）」と訳しているが、それぞれ谷崎訳「珍しく」、与謝野訳「うれしい」に近い。

(2)

【原文129-10】さて、<sup>たが</sup>かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひておぼすに、おいらかならましかば、一心苦しきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなむを、心にかからぬをりなし。

原注一〇：あの、蟬の脱殻ぬけがらのように、小桂だけを残して逃げていった女。

原注一一：気の毒な、出来心からの過ちとしてすませてしまうはずのところを。空蟬がそののち二度も自分を拒んだので、自尊心が許さず、諦められないのである。

【現代語訳】ところで、(源氏は)あの空蟬があきれるばかりに冷淡であったのを、世間の女性とは違うとお思いになると、もし彼女が素直に言うことを聞いていてくれたならば、気の毒な、出来心からの過ちとして済ませてしまう筈のところを、こしゃくにも振られたままで終わりそうなのが、気にならぬ時はない。

大野注：光源氏は前述の第二帖「帚木」の「雨夜の品定め」以降、それまで縁のなかった「中の品（中流階級）」の女性に興味を抱くようになり、その翌日に方違えのために紀伊の守の家に一泊すると、紀伊の守の父伊予の介の後妻と強引に関係をもつ。原注一〇にあるように、まるで「蟬の脱殻のように」小桂だけを残して逃げたことから、この女性は空蟬と呼ばれる。空蟬は上流貴族の

出身（中納言兼衛門督の娘）であったが、父の死で後ろ盾をなくしたため、やむなく伊予の介と結婚し中流階級（受領階級）に零落していた。一度は源氏に身を許した空蟬であるが、その後は源氏の執拗な誘いに屈することなく、誇り高く拒み通した。一方、源氏は当初、単なる興味本位から空蟬と関係を結んだものの、原注一一にあるように、空蟬が決して自分に靡こうとしないために、彼女のことがどうしても忘れられないのであった。

【豊沢66-8】却说那空蟬态度过分冷淡，竟不象是这世间的人，源氏公子每一念及，心中便想：“如果她的态度温顺些，那么就算我那夜犯了一次可悲的过失，也不妨从此决绝。但她态度那么强硬，教我就此退步，实在很不甘心。”因此他始终没有忘记过她。

訳：さて、源氏はあの空蟬の態度はあまりにも冷淡で、そもそもこの世の人ではないようだと思うにつけて、心中こう思うのであった。「もしあの女の態度がもう少し大人しく素直であったら、私もあの夜、気の毒な過ちを犯してしまったとして、これっきりになったところで気にもかけなかっただろう。だが、あの女の態度があればほどに強くて頑なでは、ここで引き下がるのは実に口惜しいことだ。」そのため源氏はいつまでも空蟬のことを忘れることが出来ないものであった。

大野注：文頭の「却说」は中国の白話小説で用いられる発語の言葉。

【林沢66-9】至於那位空蟬呢？源氏之君每一念及她的寡情，便心中悻悻然。她跟普通的女性委實大不相同；假如她能表現得柔順些，也許自己反倒可以把那一夜的事情當做一次傷心的過失而死了這條心，而今要勉強自己如此罷手，真是不甘願呢。

訳：さて、あの空蟬はどうしたであろう？源氏はあの女の薄情さを考えると、心中憤然たる思いであった。あの女は普通の女性とは実に大いに異なっている。もしあの女がもう少し素直な態度を見せてくれたら、自分もむしろあの夜のことを痛ましい過ちとして、この思いを手放せたかもしれないのに、今ではどうにかして諦めねばと思っているのは、まことに不本意なことである。

【与謝野沢55-上13】源氏は空蟬の極端な冷淡さをこの世の女の心とは思われな

いと考えると、あの女が言うままになる女であったなら、気の毒な過失をさせたということだけで、もう過去へ葬ってしまったかもしれないが、強い態度を取り続けられるために、負けたくないという反抗心が起こるのであるとこんなふう  
に思われて、その人を忘れていた時は少ないのである。

【谷崎訳104-6】ところで、あの空蟬があまりにも情ないのを、普通の女とは違っているとお思いになるにつけても、あれがもう少し柔順であつたら、心苦しい過ちをしたというだけであきらめたでもあろうものを、このまま負けて引き退ることが口惜しく、お心にかからぬ折はないのでした。

【相違点】原文「この世の人には違ひて」という個所について、豊子愷は「竟不象是这世间的人（そもそもこの世の人ではないようだ）」と訳しているが、これは与謝野訳「この世の女の心とは思われぬ」に近い。一方、林訳「跟普通的女性委實大不相同（普通の女性とは実に大いに異なっている）」では、原文の「この世の人」を「普通の女性」と訳している。これは谷崎訳「普通の女とは違っている」と同様な処理である。林訳や谷崎訳では「普通の」という言葉を加えることで、この世のすべての女性は自分に魅了されて当然だという源氏の思い上がった気持ち、そしてそうであるからこそ、空蟬が中流階級という低い身分にも関わらず自分の思い通りにならないことへの苛立ち、空蟬への諦めきれぬ思いが強く表出されている。

(3)

【原文129-13】かやうのなみなみまでは思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後、いぶかしく思ほしなるしなじなあるに、いとどくまなくなりぬる御心なめりかし。

【現代語訳】（源氏はこれまで）このような普通の女性には特に興味をおもちではなかったのだが、先日の「雨夜の品定め」以降は知りたいとお思いになる階層がいろいろあって、ますます余すところなく興味をお持ちになったのであろう。

【豊訳66-11】源氏公子先前对于象空蟬那样的平凡女子，并不关心。自从那次听

了雨夜品評之后，他很想看看各种等級的女子，便更加广泛普遍地操心用思了。訳：源氏は、以前は空蟬のような平凡な女性に対して少しも興味を持っていなかった。あの「雨夜の品定め」を聞いてからは、源氏はいろいろな階級の女性と出会ってみたいと思うようになり、さらに多くの女性に広く心を配るようになった。

【林訳66-11】 對於這類尋常身分的女性，源氏本來並沒有什麼太大的興趣；最近却頗有些好奇，願意多接近各種品第的對象，恐怕多少受了那次雨夜品評的影響吧。

訳：このような普通の身分の女性に対して、源氏はそもそもそれほど興味を持っていた訳ではなかったのだが、近ごろはかなり好奇心を抱き、いろいろな階級の女性と大いに知り合いたいと思っている。あの雨夜の品定めの影響をいくらか受けたのであろう。

【与謝野訳55-上19】 これまでは空蟬階級の女が源氏の心を引くようなこともなかったが、あの雨夜の品定めを聞いて以来好奇心はあらゆるものに動いて行った。

【谷崎訳104-8】 こういうありふれた身分の者までは、思いかけてもいらっしやらなかったのに、いつぞや雨夜の品定めのことがあるては、試してごらんになりたい品々がたくさんおできになったところから、ひとしお好奇心が限なくなられたのでしょう。

【相違点】 文頭の「かやうのなみなみ（このような普通の女性）」は、これまで源氏の周囲にいた上流ではなく中流階級の女性を指しており、林訳・与謝野訳・谷崎訳では「身分」や「階級」という言葉が使われている。一方、豊訳の「平凡な女性」は原文には忠実であるが、ここは空蟬の個性や容貌ではなく階級について論じている個所なので、階級や身分を示す言葉がある方が望ましいと思われる。

(4)

【原文130-2】 うらもなく待ちきこえ顔なる方人を、あはれとおほさぬにしも

あらねど、<sup>二</sup>つれなくて聞きゐたらむことのはづかしければ、まづこなたの心見果ててと、おぼすほどに、<sup>三</sup>伊予の介上りぬ。

原注一：(源氏の言葉を) 疑いもせず、またの逢瀬をお待ちしているらしいもう一人の人。<sup>のきば</sup> <sup>おぎ</sup> 軒端の萩のこと。

原注二：空蟬が何食わぬ顔で、軒端の萩とのやりとりを聞いていたのだらうと思うと、気恥ずかしいので。

原注三：空蟬の夫が上京した。

【現代語訳】 無心に(源氏とのまたの逢瀬を) 待っているであろうもう一人の女性を、いじらしいとお思いにならない訳ではないが、(軒端の萩とのやり取りを空蟬が) 冷やかに聞いていたのであらうと思うと恥ずかしいので、まずは空蟬の気持ちを見定めてからとお思いになっているうちに、伊予の介が都へ上がってきた。

【豊訳66-14】 那个轩端萩大概还在天真地等待着他的好音吧，他想起了并非觉得可怜。然而这件事如果被无情的空蝉知道了，他又觉得可耻。因此他想先探实了空蝉的心情再说。正当此时，那伊豫介从任地晋京来了。

訳：あの軒端の萩はおそらく、まだ無心に自分からの良い知らせを待っているのであらうと思うと、源氏は決して憐れに思わぬ訳ではないが、もしこのことがあのつれない空蟬に知られたら恥ずかしいとも思うのであった。そのため、源氏はまず空蟬の心を探ってからにしようと考えていた。ちょうどその頃、あの伊予の介が任地から都へ上がってきた。

【林訳66-12】 當然，對於那位天真地等待著自己的女孩子，他也並非不同情；只是不願意教人這般冷淡地對待自己，所以總是要先弄清楚這邊一位的真心再說。這時候，伊豫介上京來了。

訳：もちろん、あの無心に自分を待っている娘に対して、源氏も決して憐れに思わない訳ではない。ただ、このように冷淡に扱われるのも望まぬことであるので、まずはやはりこちらの女性の本心をはっきりさせてからと思っていた。この頃、伊予の介が都へ上がってきた。

【与謝野訳55-上21】 なんの疑いも持たずに一夜の男を思っているもう一人の女

を憐れまないのではないが、冷静にしている空蟬にそれが知れるのをはずかしく思って、いよいよ望みのないことのわかる日まではとあってそれきりにしてあるのであったが、そこへ伊予介が上京して来た。

【谷崎訳104-11】 そんなこととは知らないで、生一本な気持でお待ち申しているらしい今一人の人のことも、あわれとお思いにならないのではないのですけれども、情ない人に冷やかな眼で見られ給うことが恥かしく、まずこの方の心の中を見とどけてからとあっていらっしゃるうちに、伊予介が上って来ました。

【相違点】 原文の「うらもなく待ちきこえ顔なる方人」について、豊子愷は「軒端の萩」と名前を挙げている。林訳では「那位天真地等待著自己的女孩子（あの無心に自分を待っている娘）」、与謝野訳では「なんの疑いも持たずに一夜の男を思っているもう一人の女」、谷崎訳では「そんなこととは知らないで、生一本な気持でお待ち申しているらしい今一人の人」となっている。軒端の萩は空蟬の夫（伊予の介）と先妻の間に生まれた娘である。空蟬が源氏を避けて隠れたために、源氏は空蟬と間違えて軒端の萩と関係を結んでしまう。この場面で、原文には名前はないが、豊訳のように名前を記した方が読者には親切であろう。また、林文月は冒頭に「當然（もちろん）」という言葉を加えることで、源氏を軒端の萩のように手違いから関係をもった女性にも思いを寄せるとような気質の人間として描いている。これを源氏の優しさと思うか、あるいは浮気心と感ずるかは、読者によって異なることであろう。

次に、原文「つれなくて聞きあたらむことのはづかしければ（軒端の萩とのやり取りを空蟬が冷やかに聞いていたのであると思うと恥ずかしいので）」について、林文月は「只是不願意教人這般冷淡地對待自己（ただ、このように冷淡に扱われるのも望まぬことであるので）」と訳しており、軒端の萩との一件が空蟬に知られることを源氏がどう感じていたかは不明である。一方、豊訳では与謝野訳「冷静にしている空蟬にそれが知れるのをはずかしく思って」や谷崎訳「情ない人に冷やかな眼で見られ給うことが恥かしく」と同様に、源氏が軒端の萩のことを気かけながらも、それよりも更に空蟬に知られることを

心配している様子が訳出されている。これによって、読者は源氏の空蟬への執着とともに、源氏の弱さや人間らしさを感じるのではないだろうか。

尚、豊訳・与謝野訳・谷崎訳ではいずれも源氏が軒端の萩との情事を空蟬に知られたくない、つまり空蟬はおそらくそのことをまだ知らないだろうと源氏が考えているという前提で訳されている。しかし、原文は「聞きみたらむ（聞いていたのであろう）」となっており、原注二からも空蟬はその場におり、源氏と軒端の萩のやり取りを間近で耳にしていたと考えられる。

(5)

【原文130-4】<sup>四</sup>まづ急ぎ参れり。

原注四：何はさておき、源氏の邸にご挨拶に上がった。源氏の力で、現在の官職を得たのであろう。

【現代語訳】何をさておき急いで参上した。

【豊訳66-17】他首先前来参见源氏公子。

訳：伊予の介は真っ先に源氏のもとへと参上した。

【林訳66-14】由於經常蒙源氏之君照顧的關係，禮貌上總得先來拜訪一下。

訳：常々源氏の世話になっており、礼儀上とにかくまずご挨拶に伺わねばならない。

【与謝野訳55-下3】そして真っ先に源氏の所へ伺候した。

【谷崎訳104-14】何は措いてもと御挨拶に罷り出ます。

【相違点】任地から都へ戻った伊予の介がまず源氏のもとへ挨拶に参上する場面であるが、林訳だけはその理由を説明している。上記(4)で述べたように、伊予の介は空蟬の夫であり、軒端の萩の実父である。林文月は、源氏と伊予の介の関係を明瞭にし、読者が伊予の介の訪問理由について誤解しないように敢えて説明したのかもしれない。

(6)

【原文130-8】国の物語など申すに、<sup>五</sup>湯桁はいくつと問はまほしくおぼせど、

あいなくまばゆくて、<sup>六</sup>御心のうちにおぼしいづることもさまざまなり。

原注五：源氏は伊予の事情を尋ねたいと思われるが、伊予は昔から道後温泉で名高いので、こういった。空蟬の巻の碁を打つ場面の軒端の萩について「伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ」（一〇九頁）と思ったことと関連させて書いている。

原注六：源氏のお胸のうちに浮ぶのは空蟬のこと、軒端の萩のことで、嫉妬や後ろ暗い思いが去来する。

【現代語訳】（伊予の介が源氏に）任国の話などを申し上げるので「伊予の湯の湯桁はいくつあるのか」とお尋ねになりたいと思われたが、源氏は妙にきまりが悪く、お心のうちに様々なことが思い浮かぶのであった。

大野注：原文第一行目の「湯桁」という言葉は、原注五にあるように『源氏物語』第三帖「空蟬」で空蟬と軒端の萩が碁を打つ場面に由来する。源氏が空蟬に会いたい一心で、空蟬の弟小君に案内をさせ、密かに紀伊の守の家を訪れると、空蟬は軒端の萩と碁を打っている最中であつた。源氏が覗き見をしているとも知らず、軒端の萩は「いで、このたびは負けにけり。隅のところどころ、いでいで（いいえ、今度は負けてしまいました。隅の所はどれどれ何目でしょう）」と言いながら、指を折って「十、<sup>とせ</sup>二十、<sup>はた</sup>三十、<sup>みそ</sup>四十」などと数を数えているが、その様子は「伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ。すこし<sup>しな</sup>品おくれたり（数の多さで有名な伊予の湯桁も難なく数えられそうに見える。少し気品に欠ける）」と描かれている【原文108-13~109-2】。この「伊予の湯桁」というのは道後温泉を題材にした当時の俗謡に由来しており、数の多さを表している。

【豊訳66-20】谈起他那任地伊豫国，源氏公子本想问问他当地情况，例如浴槽究竟有多少①等等。然而似乎无心对他讲这些，因为心中过意不去。他正在回忆种种事情。

訳：（伊予の介が）任地の伊予の国について語り始めると、源氏は初め当地の状況、例えば結局のところ湯桁は如何ほどあるのか等、少し尋ねてみたいお気持ちになった。しかし、申し訳ない気がしてならないので、伊予の介にそんな

話すをするお心になれないようで、源氏は様々なことを思いだしておられるのであった。

豊訳注①：伊予地方には浴槽が多い。古語に言う「伊予浴槽」とは数が非常に多いことを指す。

【林訳66-16】 他在那兒儘講些任職地方的事物，教源氏之君差點想套首風俗歌問他「浴槽木桁有幾多」⑩呢。不過，此刻他心中倒有些歉疚，也暗自感慨著。

訳：伊予の介はそこで任地のことをいつまでも話すので、源氏は今にも当世流行の歌のように「湯桁はいくつ」と尋ねてみたい気がした⑩。しかしこの時、源氏はむしろ心の中いささか後ろめたく、また人知れず感慨にふけていた。

林訳注⑩：「空蟬」帖の注④既出。ここでは、伊予の介の一々細かい報告に源氏がひどくうんざりしていることを表す。

【与謝野訳55-下8】 任地の話などをしだすので、湯の郡の温泉話も聞きたい気はあったが、何ゆえとなしにこの人を見るときまりが悪くなって、源氏の心に浮かんで来ることは数々の罪の思い出であった。

【谷崎訳105-1】 いろいろと任国の話をしますので、「湯桁はいくつ」と尋ねてみたくお思いになりますけれども、何となく気が咎めますので、胸のうちで感慨を催し給うことがさまざまなのです。

【相違点】 原文の「御心のうちにおぼしいづることもさまざまなり（お心のうちに様々なことが思い浮かぶのであった）」について、林文月は「暗自感慨著（人知れず感慨にふけていた）」と訳しており、谷崎訳「胸のうちで感慨を催し給うことがさまざまなのです」に近い。豊訳は「他正在回忆种种事情（源氏は様々なことを思いだしておられるのであった）」となっており、これは与謝野訳「源氏の心に浮かんで来ることは数々の罪の思い出であった」を参考にした可能性が高い。

(7)

【原文131-13】 …大殿には絶えま置きつつ、うらめしくのみ思ひきこえたまへり。

【現代語訳】大殿（左大臣）の所には途絶えがちなので、恨めしくばかりお思い申し上げていらっしやった。

【豊訳67-16】久不赴左大臣邸宅，葵姫自然满怀怨恨。

訳：左大臣の邸宅を久しく訪れていなかったのが、当然の事ながら葵の上は恨めしいお気持ちを抱いておられた。

【林訳67-9】…故而連左大臣邸都難得回去幾次。那邊の人當然要怨恨的。

訳：そのため、左大臣の邸宅にさえめったにお戻りになっていなかった。あちらでは当然、お恨みになっておられた。

【与謝野訳56-上14】…自然左大臣家へ通うことも途絶えがちになって恨めしがられていた。

【谷崎訳106-5】…大殿にもめったにお越しになりませんので、あちでは恨めしくばかり思っいらっしやいます。

【相違点】豊訳と林訳には二つの違いが見られる。一つは、源氏のことを「恨めしくのみ思ひきこえたまへり」の主語は誰かという点である。豊訳では「葵姫（葵の上）」と明記しているが、林訳では「那邊の人（あちらの方）」と曖昧にしている。一方、与謝野訳では訳出しておらず、谷崎訳では「あちら」としている。源氏の正妻である葵の上が恨めしく思うのは当然であるとして、葵の上の父である大殿（左大臣）も同様に不満に思っていたとしてもおかしくはないであろう。そのため、ここでは豊訳、林訳のいずれでも問題はないと思われる。

もう一点は、源氏と葵の上の婚姻形態に関する表現である。豊訳では「赴（行く、赴く）」という言葉が使われているのに対し、林訳では「回去（戻る、帰る）」と訳されている。与謝野訳、谷崎訳ではそれぞれ「通う」「お越し」と訳している。平安時代の貴族の婚姻関係においては婿取り婚、つまり結婚当初は男性が女性の実家に通い、後にその実家で同居するという形態が一般的であった。婿取り婚は競争性に満ちたもので、女性の父親は娘を婿の「唯一の同居の妻」にすることで男性を取り込み、また婿取りの儀式を盛大に行うことで自らの力を世間に示した<sup>(2)</sup>。本来であれば、源氏は正妻である葵の上の実家つ

まり左大臣家に同居しているべきであるが、二人の婚姻形態は源氏が左大臣家を訪れる通い婚であった。平安時代の一般的な婚姻形態から考えると、林文月のように「回去（戻る、帰る）」と訳したくなるが、源氏と葵の上の場合は豊訳の「赴（行く、赴く）」の方が適切であろう。これは些細な相違のように見えるが、源氏と左大臣家との関係を考える上で、実は軽視できない問題である。林訳のように「回去（戻る、帰る）」と訳すと、源氏と葵の上は婿取り婚の関係になり、左大臣家は世間のみならず源氏に対しても優位な立場に立つことになる。しかし実際には、源氏は自分の行きたい時にだけ葵の上のもとを訪ねて行く自由を有しており、左大臣家との関係は絶対的なものではない。これは、その後の源氏と他の女性との関係を見ていく上でも重要な意味をもつと思われる。

(8)

**【原文131-14】** <sup>一四</sup>六条わたりにも、<sup>一五</sup>とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひてのち、ひきかへしなめならむはいとほしかし、されどよそなりし御心まどひのやうに、<sup>一六</sup>あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。原注一四：六条辺の女君に対しても。後の葵の巻に、前坊（皇太子のまま亡くなった方）の妃、六条の御息所として登場する方である。

原注一五：なかなかご承知なさらぬご様子だったのを、思いどおりになさったのち。「おもむく」（下二段）は、むかせる、従わせること。「きこえ」は、女君に対する敬語。この方の身分の高さが察せられる。

原注一：無理をしてでもといったご様子も見えないのは、どうしたことなのかと思われた。草子地。

**【現代語訳】** 六条あたり（の女君）に対しても、当初は女君がなかなかご承知なさらぬご様子であったのを（源氏が）おなびかせ申し上げてからは、源氏の態度は一変し、ありきたりなお扱いではおいたわしいことである。それにしても、お二人がまだそのような関係でなかった頃のご執心のように、無理にもといったご様子が見えないのも、どうしたことなのかと思われた。

【豊沢67-17】 那六条妃子呢，起初拒绝公子求爱，好容易被他说服；岂知说服之后，公子的态度忽然一变，对她疏远了。六条妃子好不伤心！她现在常常考虑：未曾发生关系以前他那种一往情深的热爱，如今何以没有了呢？

訳：あの六条の御息所はと言うと、当初は源氏の求愛を拒絶していたが、ついには説き伏せられてしまった。しかし思いがけないことに、説き伏せた後には源氏の態度は一変し、御息所を遠ざけるようになった。六条の御息所はどれほどお辛いことであろう！御息所は今ではよくこうお考えになるのであった：私たちがまだこうなる前、あの人はご自分の気持ちを抑えきれないとばかりに、あれ程までに私に夢中でおられたのに、あのような思いが今では無くなってしまったのはどうしてなのだろう。

【林沢67-10】 至於六條那位情人呢？當其未肯遷就之初，源氏倒是走動甚勤；一但稱心如意之後，近來卻不再那樣熱中了。以對方那種高貴的身分地位而言，受這樣的待遇可真夠委屈。不過如今要他再恢復當初未得手的執迷，卻無論如何已經不可能了。

訳：六条のあの恋人はと言うと、何としても源氏の気持ちを受け入れなかった当初、源氏は非常に熱心であったが、ひとたび思い通りになるや、今ではもはやあの頃のように夢中ではなくなった。お相手のあのように高貴な身分やお立場からすると、このような扱いを受けるのはまことにやりきれない。しかし、今となつては御息所をわがものとする以前の執着心を源氏に再び抱かせることは、どうあつてももはや無理なことであった。

【与謝野沢56-上15】 六条の貴女との関係も、その恋を得る以前ほどの熱をまた持つことのできない悩みがあった。自分の態度によって女の名譽が傷つくことになってはならないと思うが、夢中になるほどその人の恋しかった心と今の心とは、多少懸隔のあるものだった。

【谷崎沢106-6】 六条あたりも、最初は許しそうもない御気色でしたのを思い通りになされてからは、打って変ってそれほどに打ち込み給う御様子のないのが、お気の毒のようなのでした。ですが、まだお手に入らなかつた一頃の時分の御執心のような、ああいう一途な<sup>〇</sup>お<sup>〇</sup>気<sup>〇</sup>持<sup>〇</sup>には、<sup>〇</sup>どう<sup>〇</sup>いう<sup>〇</sup>もの<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>お<sup>〇</sup>なり<sup>〇</sup>にな<sup>〇</sup>れ

ないものとみえます。

【相違点】原文の「六条わたり」とは「六条あたり（左京の六条辺）」という意味であるが、ここでは原注一四にあるように「前坊（帝に即位することのないまま亡くなられた、あるいは廃位された皇太子）」の妃で、六条に住んでいた女性「六条の御息所」を指す。尚、亡夫は源氏の父である桐壺帝の同腹の弟である。この六条の御息所について、豊子愷と林文月はそれぞれ「那六条妃子呢（あの六条の御息所はと言うと）」、「至於六條那位情人呢？（六条のあの恋人はと言うと）」と訳している。二人がともに「あの」という表現を使っているのは、第四帖「夕顔」の冒頭に「六条わたりの御忍びありきのころ（六条辺のさる女性にお忍びでお通いの頃）」【原文121-1】とあるからである。この段階では六条の御息所についての詳細は不明であるが、本箇所では源氏との関係について語る上で、六条に住んでいる女性が高貴な身分であることは不可欠な要素であることから、豊子愷は「妃子」という言葉を使ったものと思われる。また、林文月はここでは「六条那位情人（六条のあの恋人）」とだけ述べているが、後に続く箇所では「那種高貴的の身分地位（あのようにならぬ身分やお立場）」と補足している。

本箇所は原注一にもあるように草子地である。豊子愷は後半部分を「她現在常常考虑：未曾发生关系以前他那种一往情深的热爱，如今何以没有了呢？（御息所は今ではよくこうお考えになるのであった：私たちがまだこうなる前、あの人はご自分の気持ちを抑えきれないとばかりに、あれ程までに私に夢中でおられたのに、あのような思いが今では無くなってしまったのはどうしてなのだろう）」と訳している。この文の直後に「女は、いとものをあまりなるまでおぼしめたる御心ざまにて…（この女性は、何ごととも度を越すほどに深く思い詰めたさるご性分なので…）」と続くことから、豊子愷はここを草子地とはせず、敢えて御息所の思いとして訳したのではないかと考えられる。

(9)

【原文132-3】 女は、いとものをあまりなるまでおぼしめたる御心ざまに

て、<sup>よはひ</sup>二齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、<sup>三</sup>いとどかくつらき御夜がれの寝ざめ寝ざめ、おぼししをるること、いとさまざまなり。

原注二：年齢も釣合わないし、世間の人が二人の噂を聞いたらと思うと。後の賢木の巻に、この方は三十歳とあり、源氏より七歳年上である。この時は二十四歳。

原注三：こうした君の訪れのないさびしい夜々、ふと目を覚まされては、一層思い悩み悲しまれることがあれこれと多い。「夜がれ」は、男が夜、女の家に通わないこと。

【現代語訳】この女性は、何ごとも度を越すほどに深く思い詰めなさるご性分なので、源氏とは年齢も釣り合わず、もし二人の秘め事が世間に知れ渡ったらと思うと、ますますこうした源氏の訪れぬ辛い夜々ふと目を覚まされては、いっそう思い悩み、悲しまれることがいろいろと多いのである。

【豊訳67-20】这妃子是个深思远虑、洞察事理的人。她想起两人年龄太不相称①，深恐世人谣传，两人为此疏远，更觉痛心。每当源氏公子不来，孤衾独寝之时，总是左思右想，悲愤叹息，不能成眠。

訳：この妃は思慮深く先々のことを考え、道理を見極める人である。二人の年齢があまりに釣り合わないことを思い、人の噂になることをひどく恐れ、そのために二人が疎遠になるかと思うと更に胸が痛むのであった。源氏の訪れがなく、一人で過ごす夜にはいつも、あれやこれやと考えては悲しみにくれて嘆息し、眠れぬ夜を過ごした。

豊訳注①：御息所は今年24歳で、源氏は今年17歳である。

大野注：御息所と源氏の年齢差について、与謝野訳では8歳となっているが、原注二にもあるように一般的には7歳差とされている。

【林訳67-12】六條の夫人氏多愁善感的人，她既擔心自己和源氏年歲太懸殊，又憂慮萬一這一份私情洩露出去，難免將受世人指責，故而往往空閨難眠，獨自沉思到天亮。

訳：六条の御息所は感傷的な人であった。自分と源氏の年齢がかなり離れていることを心配し、また万が一にもこの秘め事が外に漏れたら人の誹りは避けら

れないだろうと心を痛めていた。そのため一人で過ごす夜は、ややもすればよく眠れず、夜が明けるまで一人もの思いに沈むのであった。

【与謝野訳56-上20】六条の貴女はあまりにもものを思い込む性質だった。源氏よりは八歳上の二十五であったから、不似合いな相手と恋に堕ちて、すぐにまた愛されぬ物思いに沈む運命なのだろうか、待ち明かしてしまう夜などには、煩悶することが多かった。

【谷崎訳106-9】①女君は、ものをあまりに突き詰めて考える御性分なので、年が釣り合わないことではあるし、世間の人<sup>と</sup>が漏れ聞いたらばと、こんな具合に跡絶えがちな夜の独り寝のお夢の破れがちな折々、ひとしおしょんぼりとして物思いにお耽りになることどもが多いのです。

谷崎注①：六条御息所

【相違点】ここでは、六条の御息所の性質「いとものをあまりなるまでおぼしめたる御心ざま（何ごとも度を越すほどに深く思い詰めなざるご性分）」について、豊訳と林訳は大きく異なっている。豊訳は「深思遠慮、洞察事理の人（思慮深く先々のことを考え、道理を見極める人）」であるが、林訳では「多愁善感の人（感傷的な人）」となっている。豊訳は谷崎訳「ものをあまりに突き詰めて考える御性分」に、また林訳は与謝野訳「あまりにもものを思い込む性質」にそれぞれ近い。ここでは、六条の御息所の人となりについてはまだ詳細に語られてはいない。しかし、『源氏物語』全編を通じて、彼女が決して単に感傷的で涙にくれているような女性ではないことは明らかである。御息所は非常に知的な女性であり、そうであるからこそ源氏との関係や二人の先行きを深く思い煩い、またそのような自分を持て余しているのである。したがって、ここでは御息所の理知的な一面も感じさせる豊訳の方が適しているのではないかと思う。

(10)

【原文132-13】〔源氏は〕見かへりたまひて、<sup>九</sup>隅の間の<sup>一〇</sup>高欄に〔中将を〕しばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪<sup>九</sup>のさがりば、めざましく

も、と見たまふ。

原注九：御殿の四隅の角に当る所。ここは寝殿の簀子の角。女君からは見えな  
い。

原注一〇：簀子の外側の欄干。

【現代語訳】源氏はお振り返りになり、中将の君の手をとって寝殿の隅の間の  
高欄に少しの間お座らせになった。源氏は中将の君のたしなみのある、かしこ  
まった態度や黒髪のかかり具合を眺めて、実に見事なものだと思うのであっ  
た。

大野注：中将の君は御息所の女房。

【豊記68-5】源氏公子向她回顾，教她在庭畔的栏杆边小坐，欣赏她那妩媚温柔的  
风度和款款垂肩的美发，觉得这真是个绝代佳人…。

訳：源氏は中将の君を振り返ると、庭近くの欄干のあたりにしばらく座らせ、  
そのあでやかで優しい雰囲気とゆるやかに肩にかかる美しい髪を素晴らしいと  
思い、まことに絶世の美人だと思うのであった…。

【林記67-17】源氏之君走幾歩之後，回頭來看，要她稍坐在轉角的高欄下。女的  
謹守着主僕之禮，那種謙恭的態度啦，低頭讓髮絲垂在額際的模樣啦，另有一種  
吸引人之處。

訳：源氏は数歩あるくと振り返って、中将の君を曲がり角の高欄の下にしばし  
座らせた。中将の君は主従の礼をかたく守っており、その謙虚で礼儀正しい態  
度や、頭を下げて髪が額のあたりにかかる様子には、また別の魅力があった。

【与謝野訳56-下10】源氏は振り返って曲がり角の高欄の所へしばらく中将を引  
き据えた。なお主従の礼を崩さない態度も額髪のかかりぎわのあざやかさもす  
ぐれて優美な中将だった。

【谷崎訳107-3】君は振り返って御覧になって、隅の間の勾欄の下にしばらく  
お引き据えになります。用心深くもてなしている体のこなし、髪の垂れ具合な  
どを、目の覚めるようなど、感心して見ていらっしやいます。

【相違点】源氏が中将の君に対して「めざまし（見事だ）」と思うのは、その  
「うちとけたらぬもてなし、髪のさがりば（たしなみのある、かしこまった態

度や黒髪のかかり具合)」の故である。この「うちとけたらぬもてなし」というのは、源氏が中将の君の手を取って座らせるというような親しげな態度を取っても、中将の君が源氏に対してあくまでも主人の恋人という態度を崩さず、きちんとしていることを指す。この点について林訳では「謹守着主僕之禮、那種謙恭的態度（主従の礼をかたく守っており、その謙虚で礼儀正しい態度）」と表現している。それに対して、豊子愷は「妩媚溫柔的风度（あでやかで優しい雰囲気）」と訳しており、原文とは少し意味が異なっている。

また、源氏は中将の君に対して「めざまし」と称賛しているが、それは前述のように中将の君の外見だけではなく、態度も含めての評価である。豊訳では「真是个絶代佳人（まことに絶世の美人だ）」となっているが、これでは中将の君の立場をわきまえた、謙虚で主人思いの人柄が訳出されていない。一方、林訳では「另有一種吸引人之處（また別の魅力があった）」となっており、源氏が中将の君に対して御息所とはまた別の魅力を感じていることが表現されている。本箇所が続く場面で、源氏は中将の君に誘い掛けるような歌を詠むが、中将の君はそれを御息所のための歌と詠み替えて源氏の誘いをさりりと躲す。林文月の「また別の魅力」という訳は原文とは少し異なるが、その後の流れに繋がりがやすい。

### 3. おわりに

以上、『源氏物語』第四帖「夕顔」の中国語訳について、前編に続いて十例を挙げ、豊子愷訳と林文月訳の比較を行った。豊訳と林訳の相違点について、前編では以下のように分類した。

- (a) 日本固有の事物や風習に関する箇所：6点
- (b) 和歌の翻訳に関する箇所：2点
- (c) 仏教に関する箇所：2点
- (d) 原文読解あるいは文法理解の相違が著しい箇所：2点

数的には (a) が最多であったが、内容面では (b) の和歌に関して最も著しい相違が見られた。

続編にあたる小論では、取り上げた十例のうち八例が（d）の「原文読解あるいは文法理解の相違」に相当するものであった。それ以外の二例（3）（5）は役職や状況等に関する補足説明の有無である。また八例のうち、（1）と（7）はそれぞれ豊子愷と林文月の誤訳と考えられる。（8）は草紙地の扱い方に相違が見られた。

上記以外の四例（2）（4）（9）（10）に関しては、登場人物に対する訳者の認識が反映された翻訳となっており、読者に特定の印象を与える可能性が高いように思われる。もっとも翻訳は一種の創作であり、訳者の意図が意識的あるいは無意識的に反映されるのはやむを得ない。また翻訳であれ、古典原典であれ、読書とは非常に個人的な行為であり、同じ作品に触れても個々の印象や感想が異なることも大いにありうる。しかし、そうであるからこそ、訳者の意図が作品そのもの、あるいは登場人物の性格形成に如何なる影響を及ぼしているかを明らかにすることは、これまでの翻訳作品を理解する上でも、また今後さらに優れた翻訳を生み出す上でも不可欠な作業ではないかと思われる。

尚、小論のテーマは前編と同じく、2019年度の東洋大学大学院の授業「中国文学演習」で扱ったものである。同授業に参加した院生の皆さん（2019年当時、東洋大学大学院文学研究科に在籍されていた楊若林さん、劉雨佳さん、鄭丹さん、そして輔仁大学文学部大学院からの留学生の蔡佩吟さん）には、豊訳と林訳の比較に関して様々な相違点を指摘してもらい、また中国語母語者という立場から多くの有意義なご意見を頂戴した。ここに深く感謝の意を表する。

また、森本幹雄先生には現代日本語訳に関する貴重な資料を多くご提供いただいた。この場を借りて心より深謝申し上げる。

## 注

（1） 小論で使用した訳本等は前編と同じく下記の通りである。

原文：石田穰二・清水好子校注『源氏物語』第一巻（新潮日本古典集成新装版2016）。

豊子愷訳本：『源氏物語』上巻（人民文学出版社2002）。

『源氏物語』第四帖「夕顔」の中国語訳について(2)〔大野 公賀〕

林文月訳本：『源氏物語』（一）（洪範書店2012）。

与謝野訳本：『源氏物語』上巻（日本文学全集1、河出書房新社1962）。

谷崎訳本：『新々訳 源氏物語』第1巻（中央公論社1964）。

- (2) 胡潔「『源氏物語』と平安時代の婿取婚」『比較日本学教育研究部門研究年報』第14巻、2018年3月30日、11-12頁。

本研究は JSPS 科研費17K02465の助成を受けたものである。

—おおの きみか・東洋大学法学部教授—